



かわいい



<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/>

「勉強」することの意味

校長 窪田 剛久

コロナ禍が一向に終息の気配を見せていません。今年は夏休みが短く、出かけることにも制約がありました。厳しい状況が続いています。そんな折、保護者の中には子どもから「つまらない!」といった訴えを受けられた方がいらっしゃるかもしれません。学校でも、子どもたちが楽しみにしている行事やふれあい活動の見直しを迫られています。本来学校は楽しい場所であるはずですが、子ども達からは「勉強ばかりでつまらない!」との声が聞こえてきそうです。



コロナの影響が続いていた年度初め、と言っても6月ですが「勉強はなぜしなければならないのか。」そんな話を朝会で子ども達にしました。私もそうでしたが、勉強を進んで行うのはなかなか難しいことですね。でも、もしかしたらそれは、大人が子ども達に「勉強」の必要性を、うまく説明できていないからかもしれません。「そのままだといいい大学に入れなよ。」「もっとがんばらなよ、いい会社に勤められなよ。」これは、学歴社会が生んだ厳しい現実を映し出したかのような言葉ですね。こういった価値観が根強く残っているのも、日本の社会の現状です。しかし、小学生にとって「大学」や「会社」は遠い未来の話。そこから「勉強の必要性」を説いても、説得力に欠けるかもしれません。何よりも、「勉強」は子ども達にとって、もっと魅力に満ちたものであるべきではないでしょうか。私は、次のように話しました。



「国語はね、人の気持ちを理解するための勉強です。人に自分の気持ちを分かりやすく伝えるための練習です。」今の社会では、コミュニケーション能力が最も重要視されるスキルだと言われています。国語の教科書には昔ながらの物語文もありますが、プレゼンテーションをゴールに設定した説明文など、コミュニケーション能力を育成するための単元であふれています。ただ読み書きを練習するだけの教科ではないのです。他の教科についてもお話をしたのですが、それはまたの機会に。

さて本題に戻りますが、つまり勉強するのはテストで高い点をとったり、受験して有名大学に進学したり、給料の高い会社に就職し、自己実現からかけ離れた仕事をしたりするためではないということです。「国語」「算数」「理科」「社会」…を勉強しているではありません。「国語」「算数」「理科」「社会」…を通して、「人としてどう生きるか」、その生き方を学んでいるのです。かつて「学問」は全て「哲学」に通じるものでした。太古の昔から、人々は生き方に思いを巡らせていたのでしょう。専門性がまだ低い小学校だからこそ、「勉強」に対するそういったとらえなおしが必要なのではないでしょうか。

このように考えると、「勉強」とは、長い人生という海を航海するために必要な、セイルや舵、コンパスや海図、羅針盤を手に入れる魔法のようなものに思えてきます。大人がそう思うことで、子どもはきっと「勉強」にもっと魅力を抱くものと、私は信じています。

コロナ禍は、当面の間続いていくのでしょうか。そうした状況下で私達職員一同は、学習形態やリズムに変化を持たせながら、カリキュラムなどを工夫しています。生きていくためのアイテムを手に入れるための「勉強」を、子どもたちが「楽しい」と思えるように、そして自分たちも「楽しい」と思えるように、日々努力を重ねていきます。

